

と喜びを手にすることが出来たのだ。

西行の何たるかを、なおもよく擱めない儘に、「西行考」を記し、予期し、心配した通りに、「西行の新たな姿」は、これを発見することが無理であったが、それでも、西行に対する「私なりの親しみ方と接し方」については、これを、随所に記述することができた。ペンを置こうとする今、これはこれでよかったのだと思っている。今回の程度の努力で、西行の新たな何かを見つけてしまったら、西行に挑戦し続ける今後の楽しみが消えてしまう。

それにしても、西行に係わる多くの書物に、何ともお礼の言いようがないほどにお世話になった。

「まえがき」でも一部記したが、久保田淳編の『西行全集』、渡辺保著の『西行山家集全注解』、目崎徳衛著の『西行の思想的研究』と『西行』、日本古典文学大系29中の、風巻景次郎校注の『山家集』、桑原博史著の『西行物語全訳注』、そして、安田章生著の『西行』と『安田章生文集』、加えて、辻邦生や、瀬戸内寂聴や、白洲正子の文学としての「西行」等々、まことに多くの、真に西行を知り、真に西行を愛する方々に、言葉に尽くしようのない程の教えを受けた。そして、例えば、安田章生氏の『西行』を読む時、本物の学問、研究が深く進むと、その記される内容は、これほどまでに分かり易くなるものなのかと、研究・学問のありようを強く、しっかりと教えていただいたりもした。

手にさせていただいた書物の数々を明記して、改めて深甚の謝意を表す。

〔平成十一年十一月三十日 受理〕

しかし、人間の死、それも、自分で自分の命を意図的に絶つという方法以外の、所謂、自然体の死に、「願望と寸分も違わぬ死」が、果たして存在するものであろうか。

今日では、もはや短命の部類に入る六十代半ばの江藤淳の死も、当人が長年願ってきたそれとは、まことに程遠い姿の死の迎えようとなった。江藤は、本当のところは、元氣潑刺とあと幾年も生き抜き、論述し残している漱石のあれこれを世に問い、また、文芸評論のジャンルそのものも、小林秀雄の築いた世界に、なお百尺干頭一歩を進めて、より高度な文学領域へと、これを導きたかったに違いない。それが不幸にも、愛してやまない者の早い死に会い、じわじわと虚脱感に覆われ、遂には自ら命を絶った。

辻邦生の死も、当人の願いの叶わなかった点において同一である。近影のアップ写真に見られる溢れる生氣と、世の人々に贈る柔和にして、きらりと光る眼差しはどこに、死の影をよみ取ることができらるであろうか。それでも、辻邦生も亦、間違はなく死んだのである。人の死は、願望を遙かに遠く離れたところからやってくる。そして、そのことを、西行ほどの人物が、心得、覚悟していなかっただけではない。だからこそ、西行は、先の歌の冒頭において、「願はくは」と詠んだのである。

世の中の絶対多数の事々は、願っても、願っても思うようにはいかない。それが、いかに悲しくとも現実である。

それでもなお、人間には、どうにも捨て切れない願望が、時に、ある。西行の場合、それは、「桜への思い」であった。ひたすらに桜花を慕い、桜花の美に、わが心の内を幾らかなりと近づけたいと願ひ続けた西行は、死を迎えた己れの身を、静かに、そっと、穏やかに、桜花のもとに横たえたかった。だから、無理は重々承知の上

で、「願はくは」と詠ったのである。

そうした西行が、「一品経和歌懐紙」に、直筆で一首の歌を記しておいたことを、私はこの上なく嬉しく思う。

わたつうみのふかきちかひにたのみあれば

かのきしべにもわたらざらめや

生きること何の保証もない混乱期にあっても、「ふかきちかひ」があれば、俗世の苦渋から解放され、幸せ多き「かのきしべ」にも無事到達することが出来るのだ。このように西行は、願いとすることの成就について明言した。そして、当人自身が、死に際しての限りなく贅沢な願いを、願いの儘に現実化して見せたのである。事實は、偶然中の偶然の出来事であろうと、念じた夢の実現を、しつかりと天下に示した人物が西行なのだ。それ故、安楽なる死を切望してやまない世人が、西行をして、大願成就を見事に成し遂げた、人にひいでた人物と見るのも、至極当然なことではある。

この私の思い、表現の中には、所謂、「造物主」に係わる言葉は顔を出さない。私の中にあっても、西行は、ある時は、あく迄人間の域を出ることのない生臭い存在であり、時と状況によっては、絶対的にして、純粹無垢の存在となり、まことに揺れに揺れている。しかし、西行に係わる思いは、「揺れに揺れて」一向に差し支えないのだ。今回、私の記した「西行論」は、まことに些細なものである。しかし、小さな枠内のものであっても、西行を思い、西行の世界に浸っている中に、西行そのものはますますもって巨大な存在となり、そのもとに身を寄せる私は、いわば、大樹の肌を体にあずける安心

あとがき

高橋英夫氏の『西行』（岩波新書）の「あとがき」には、深く首肯するところがある。氏は、文章の前半部において、

西行はさまざまな場所にいる、というふうには感じた。文学史と精神史の交差点にも西行はいた。「隠栖」と「美」の交点、「聖」と「俗」の接点にもいた。それは二つのものの中間という場所といえるのかもしれない。時間的にみても、今から八百年前の人西行は、日本の歴史のほぼ真中あたりにいたわけである。ただ「中」であるといっても、世界の「中心」に位置しているというよりは、さまざまな身分、職業、生活のあいだに立った中間者の雰囲気をもっている。それが西行であるらしい。こうした複雑な存在感によって、私は西行に魅せられることになった。

と記している。

西行に魅せられていった多くの人々の中には、高橋氏と気持ちと同じくする人が数多くいるであろう。また、同じ「あとがき」で、氏は、「西行はたえず物思いにつきまとわれた人間だったが、それが何だったのか分りにくいところがある。あるとき、ふと分ったような気がしても、次の瞬間にはまた分らなくなったりする。」とも記している。多くのことを考え、それら全てに一つ一つのしっかりとした見解を所有している人間には、その広さと深さゆえに、その言動が、一見、変幻自在なものとしてこちらの目に映ってくることもある。西行の「分らなさ」も、西行の大きさが生み出す、そうした姿の一つなのであろう。

私にしても、前述の通り、「西行の出離」、そして、「西行の生と死」に関して、私なりに西行に関する思いの一端を記してみたが、しかし、記し終えた今、こういう内容では、余りに言うべきことが不足しているとか、その表現では、言葉足らずもいいところだと思うところが多々ある。

本文において、私なりに思いを記してみた「願はくは」の歌一つにしても、目を置いて新たにこれに関する思いを記してみると、次のような文章が誕生するのである。

大願成就の一例として、よく、西行の「願はくは」の歌が引かれる。

願はくは花のしたにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

西行は、歌として詠みあげた願いの通りに、桜花爛漫の時を眼前にした陰暦二月、しかも、満月の頃に命を終えた。享年七十三歳。当時としては、勿論、長寿を全うしての昇天である。

かつて、それぞれの時代に慕われ、今日もなお敬愛されて止まない西行への思いの一隅には、僅か二十三歳にして出家し、不惑の歳を挟む前後に、保元・平治の乱という、我国の歴史上、大きな混乱を引き起こした戦乱の期に、否も応もなく身を置きながら、最晩年においては、河内国弘川寺に心静かに庵を結び、その地において天寿を全うした人物への、よろしかったですなという、安堵の思いがあるのかもしれない。言ってみれば、一つの人生を、正直と真摯さによって生き抜き、死という終結の場において願望を成就させた者への共感と讃嘆である。

1396 我のみぞわが心をばいとほしむ

あはれむ人のなきにつけても

こちらが打ちしおれている時、周囲の人々は、何かと慰めの言葉をかけてくれる。そして、それはそれで、有難いことではある。

しかし、わが身の悲しみを、どうしようもない悲しみとして、それに、しつかりと耐えていくのは、結局は、己れ自身の務めなのだ。自分同様、多くの苦勞を抱えて生きている人に、こちらのきつさを背負ってもらうのは、思えば限りなく虫のいい話となる。

1302 山風に峯のささ栗はらはらと

庭におちしく大原の里

時に来訪者があるとはいえ、大原の里は、この上なく淋しい。普段は耐えて過ごす寂しさも、たまには、厳しく胸をしめつける。

そうした折も折、強い山風に押しやられて、峯のささ栗が庭先にまでやってくる。とたんに、その小ささしば栗は、歌聖西行の、豊かな友と化していく。

1291 山深みけぢかき鳥のおとはせで

物おそろしきふくろふのこゑ

永の年月、「ふくろう」は、大事な鳥として人々に迎えられている。「福」を呼ぶものとしての歓迎である。

しかし、山深き所に住まう人間にとって、「けぢかき鳥のおと」は全く聞こえず、ただただふくろうの、あのどすの利いた声のみが聞こえてくるというのは、これを歓待の気持ちで耳にすることはとうてい無理であったと思われる。

1266 光さす三笠の山の朝日こそ

げによるづ代のためしなりけれ

世の中が、格別に大きな変動を見せることは、歴史上に幾度もある。

人が動き、国が動き、地球そのものが日々動いているのであってみれば、「変動」が、時に多大なものとなるのも世の常なのかもしれない。それにしても、国内一つを見ても、その姿、形、中味の、何と目まぐるしく、落ちつきのないことか。若者が身につける服装ごときものの変容ならば、我には縁の無いことと、目を他に転じておればよい。

しかし、教育上の理念、育児上の覚悟、思想への価値観等々が、くるつくると、定めなく変わっていくというのは、これはもう、地球の自転停止と等しいほどの問題となる。

「百年河清を待つ」という、気長く、それゆえに、ずっしりとした重みを持つ言葉が、かつての時代には生きていた。

三笠の山の朝日のごとく、このことと、このことだけは、歳々年々一向に変わりようがない。そうした、動かぬ世界と状況が、人が、人としてしつかりと根を張って生きていく上では、必要、不可欠、絶対に手放すことの許されないものとなるはずだ。

1517 瀬を早み宮滝川を渡り行けば

心の底の澄むこちする

炎天下の夏、川に行き会えば、べたつく靴を放り投げて、バタバタと川の流れに足を踏み入れた。大きく息を吸いこんで、子供なりに、僕は幸せ！と叫んだものだ。

急にして、清らなる川の流れの、人の心を澄みわたらせること、昔も今も変わろうはずがないのだが。

1511 呉竹の節しげからぬよなりせば

この君はとてさし出でなまし

本来、仕事真つ平ご免の人間などいはいはしないのだ。しっかりと働きたいが、妙に嫌な節々の多い世の中、加えて、仕えるに足る人物もなかなか目に入らぬ。贅沢を言い続けていては、それこそ口が干上がるが、この世に一度の人生であれば、「この君こそは」と、嬉々と叫んで、その方と共に、持てる力の全てで仕事に励んでみたいもの。

1439 とにかくに厭はまほしき世なれども

君が住むにもひかれぬるかな

西行の、「出家前の作なることはあきらかだ」と言われている歌。その通りであろうと思う。

やんやの喝采を受けながらの義清の日常生活ではあったが、彼の胸中には、常に、「厭はまほしき世」との思いがあった。それでもこの頃、同じ俗世に、「君が住む」が故に、なかなか一つの思いを、決行に移すことが出来なかったのである。

1427 われからと藻に住む虫の名にしおへば

人をばさらに恨やはする

西行とて、腹を立て、人を恨むこともしばしばであった。そんな時、彼は、海の藻に住む「われから」を想ってみる。

事の非は、一切相手にあると思っていたが、その非の一部は、よく自省すれば、「われから」出たものでもある。「お相子か」と、自分に言い聞かせて、憤りを押さえていく。

西行も、今を生きる私達も、喜怒哀楽の世界は、一向に変わりようがない。

1420 言ひ立ててうらみばいかにつらからむ

思へば憂しや人の心は

恨みのほどを、心のままに言葉とすれば、後に尾を引くこと、推して知るべしである。かといって、きつい思いを、わが胸のうちから一步も外に出さなければ、心は、いつか、荒れに荒れてくる。恨みは怖し、それを言うも言わぬも、また怖し。

とは因果なもの。どう身心が脆くなろうと、何かをしたい、世の中のいい加減さを老いたこの手で正してみたい、そんな思いは、なかに消えることがないのである。

すぐれて生きる者の悲しみは、死を迎えるその最後の最後まで、「及ばぬ身」でも、もつと何かをするべきなのだ、激しく強く、鞭をわが身に当て続けることにあると言わべきか。

1613 世の中に亡くなる人を聞くたびに

思ひは知るを愚かなる身に

親しき者が死に至れば、自ずと人の世の無常が身に沁みる。しかし、悲しいのは、幾らかの期間だけ。時が流れれば、次なる者の逝去まで、無常の悲しさは、はるか遠くのものとなる。この愚かなる身の、何と性根の入らないこと。

1635 友になりて同じ港を出る舟の

ゆくへも知らず漕ぎ別れぬる

北面の武士として生きる若き義清には、男女を問わず、多くの親しき者がいた。脱俗した後の西行にも、大きな権力を手にしている者をはじめとして、なお数多くの知人がいた。

そして、それらの中には、真に「友」と呼ぶべき者も幾人かはいたのである。

しかし、西行は、信頼高き、最高の友と手に手をとって「同じ港」

を出発したとしても、やがては、互いに、遠くはかなく漕ぎ別れてゆくのだと、その胸中には、辿り着くその前方に見えるものを、しっかりと承知していたのである。

1640 山里の心の夢にまどひ居れば

吹きしらまかす風の音かな

方丈の庵に身を置いて、わが心の内を洗い清めんとした鴨長明も、俗念の惑いから脱出するのは容易なことではなかった。

西行もまた、北国を巡り、山里に移り住んで、心身の鍛練に励みながらも、しばしば煩惱に嘖なまれた。

そうした折に、限らないやさしさで身を包み、心の中を正しく揺り起こしてくれるのは、そっと吹き寄る風。その風の発する美しい音。

1535 茅花^{つばな}抜く北野の茅原あせゆけば

心すみれぞ生ひかはりける

北野の茅原には、もはや、茅花の豊かな季節は過ぎ去ってしまったと、嘆くなかれ。つばな無きあとには、ほれ、心を澄ますすみれの花が、あたりいっぱい咲きほこっているではないか。

人も流転、自然も流転。流転の中にこそ、えも言われぬ味わいが、貫き流れているのだ。

84 たぐひなき花をし枝に咲かすれば

桜にならぶ木ぞなかりける

これほどに、桜花を讚える西行は、見事に花開き、一夜の雨や風で、惜しむ間もなく散っていくこの日本の代表的樹木に、どれほどの深い思いを抱いていたのであろうか。誰ととも、美しいが故に桜は大好き。しかし、それだけにはとどまらないものが、西行の桜にはあったのではなかったのかと、ふと思ったりもしてみる。

115 散るを見て帰る心や桜花

むかしにかはるしるしなるらむ

歳を重ねることの喜びと有難さは、こんなところにも誕生してくるのであろうか。

一度目にしたら、見飽きるまで、その場を離れることの出来なかった昔なのに、今や、鑑賞真つ最中であらうと、必要とあれば、では、これにておいとまをと、執着なしの行動がとれる。

欲深き姿が生む老醜を、歌聖西行は、努力して排する術を手にしたのかも知れない。

1548 山桜咲きぬと聞きて見に行かむ

人と争ふ心とどめて

思えば、随分と他の人と争いながら生きてきた。山桜一つを見に

ゆくにしても、誰よりも真つ先にと、妙なあせりを覚えたりもした。しかし、そんな、せりあいはもういい。これからも、その季節の到来を待ちわびることに変わりはあるまいが、桜は既にすっかり咲いているよと、誰かに教えてもらった上で、ゆっくりと味わいに出かけていこう。

さて、西行、その桜の候がやって来て、行動は、「覚悟のまま」となったものかどうか。

1572 憂き世とも思ひとほさじおしかへし

月のすみけるひさかたの空

星にせよ、川のせせらぎにせよ、山脈やまなみにせよ、ともかく自然の姿を、心を込め、感嘆の情を深くして眺めることのできる者は幸せである。

西行もまた、どうにも世の中のいい加減さに心苛なまれてならない時、夜空に輝く月を眺め、そこから、生きる元気をもらい受けること、しばしばであった。

1603 ふりにける心こそなほあはれなれ

及ばぬ身にも世を思はする

鑑賞する者もまた、齢を多く重ねることで、詠み手の心がよく分かることがしばしばある。

年を重ねれば、体も弱るが、心もまた萎えてくる。しかし、人間

桜花の美しさに、いつもいつも身を焦がす西行であった。

里山の新緑にせよ、奥山の谷川に枝を伸ばす山の紅葉にせよ、心の一切をそこに奪われて一刻を過ぎすというのは、それが日々の忙しさの中の偶なる姿ではあっても、ふっと、生きる元気を回復させてくれる。

西行の熱き心を、俗世にあっても、何かの形で抱いておきたいとの願いが湧く。

34 鶯の春さめざめとなきあたる

竹のしづくや涙なるらむ

限りなく感傷的な西行の世界ではある。

春雨に濡れる竹林において鳴き続ける鶯の声を耳にしながら、眼前の竹から次々とこぼれ落ちる雫の群、これは鶯の涙ではないのかと心やさしく想ってみる。

男にも、そうした少女の感傷があつてよいのだ。

48 主に風わたるといとふらむ

よそにうれしき梅のほひを

西行には、おちゃめなところも、たつぷりとある。

隣家の梅は、美しく花開き、いい香りをふんだんに放っているのに、その香の多くは風に乗って西行のもとにやってくる。運ばれてくるこのにおいを見事さから察するに、隣家の主は、労せずしてい

い目を見ているこの私を、さぞや、こんちきしようと思い、くやしがつているであろうよ。

4 たちかはる春を知れとも見せがほに

年をへだつる霞なりけり

誰にも、ついつい使ってみたくなる言葉がある。「見せがほ」は、西行好みのものの一つ。

たなびく霞は、新たな春の世界と、旧きものを隔てさせ、自然ともども、心のうちも新鮮なるものにしてくれる。

人は、季節の節目節目に、それ迄の己れと異なる、新たな姿をそつと見つめてみたくなる。

25 今日はまだ思ひもよらでかへりなむ

雪つむ野辺の若菜なりけり

本当は、口にまろやかな若菜を、西行とて摘んで帰ったかたに違いない。その為に、「雪つむ野辺」に出かけたのだ。しかし、溶けた雪から必死に芽を出す若草は、やはり、摘むのに躊躇する。

一茶もまた、「やれ打つな蠅が手を擦る足を擦る」と歌ったが、やさしき者の歌は、いつもこうして、限りなく心おだやかなものとなる。

も似た澄んだ目で、時に穏やかに、時に厳しく見つめていたのだと、私には思えてならないのである。

私は、己れの死際の願いを詠みあげた、かの有名な歌、

ねがはくは花のしたにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

仏には桜の花をたてまつれ

わが後の世を人とぶらはば

という、この二首にしても、西行が、俗なる人間の一人にとどまっていたならば、到底、口にする事のない歌であったろうと思う。

人が、一人の人間として全力で生き、わが人生としては、もはや行きつくところはこれが限界、というところに迄到達した時、人は、人を超え、わが死への願いにしても、これほどまでにあっけらかんと、心に湧き出るものを、湧き出る儘に、世の人々に示すことができたのではないのか。そして、周知の如く、西行は、西行の願い通りにこの世を去った。そして、その願望その儘の死は、西行自身求めた死にして、造物主が、それをよしとした死の姿であった。そうではなくして、この上なく欲張り一杯の願いと寸分だに違わぬ死にざまが、神ならぬ人間の世界にどうして誕生するであろうか。

俳聖芭蕉を始めとする多くの人々が、西行を思い慕ってやまないのは、その胸中奥深くにおいて、純粹なる姿、今や、神の尊厳にほど近いものと呼んでいい姿を、無意識のうちに感じとり、見つめとっていたからではないのか。

私には、西行という確固たる人格の死は、そうした姿で、やさし

く、強く、この身に迫ってくるのである。

第三章 西行の秀歌

歌聖西行の歌は、『山家集』に収められている歌数だけでも膨大である。そして、その中に、愚作なるものは、ただの一首だにありはしない。

したがって、以下にとりあげる歌は、あくまで私が得て勝手に取り出し、秀歌中の秀歌なりと、これまた勝手に取り決めたものである。それにしても、『山家集』を机上に置き、西行の世界を、次から次に読み味わい、時に、立ち止まって、解釈・鑑賞風の行為をとるということの、何と楽しく、嬉しいことか。

なお、和歌の引用は、渡辺保氏の『西行山家集全注解』に拠らせていただいた。

66 水底に深きみどりの色見えて

風になみよる川やなぎかな

牧水は、「海底に目のなき魚の棲むといふ 目のなき魚の恋しかりけり」と詠んだ。

思いを抱かず、ただぼんやりと目をやる「水底」や「海底」には、何の変哲もないが、見ることをし、思うことを為せば、そこには、さまざまの水底があり、海底が浮かび出る。

77 吉野山こずゑの花を見し日より

心は身にもそはずなりにき

西行を知る多くの人々は、西行の、この巧まらずして表に浮かび出る人間的な姿に、自分もまた自然なる姿に身を転じ乍ら、引かれ、魅せられていったのではないか。

それ故にこそ、西行の、

山里に憂き世いとはむ友もがな

悔しく過ぎし昔かたらむ

もろともに影をならぶる人もあれや

月の洩りくる草の庵に

さびしさに堪へたる人のまたもあれな

庵ならべむ冬の山里

といった歌に、脱俗の身が、今更、何を女々しくといった思いは、微塵も抱かず、ふと気がつけば、わが身は西行の庵に在って、歌聖西行と親しく膝を接して、心穏やかに過ごしていたということになるのであろう。

歌聖と呼ばれる域に到達しながら、西行の身は、限りなくいつもそんなじよ其処らにいる人としての暖かさに包まれていた。

西行の歌は、西行の生を、そのように語っている。

其の二 西行の死

波たかき蘆屋の沖を帰る舟の

ことなくて世を過ぎむとぞおもふ

誰だって、死は穏やかに迎えたい。

「波たかき」沖合で、激しく舟に揺られながら、反吐をはきつつ人生の終焉を迎えるというのは、願わくば、わが身からも遠ざけたい。西行の生きた時代は、政治的にも経済的にも不幸な時代であった。頼朝が、天下統一の業を一応なりと成し遂げたのは、西行が没するほんの少しばかり前のことである。西行がよくよく知り得ている者、あるいは、西行と血のつながりのある者達が、戦乱の中にあつて、家を没落させ、その命を失っていった。一見穏やかな歌を、数限りなく生み出していった西行の心中には、人の命を軽々に扱い、本来、人の心を安らげてやまない自然を、人間の勝手で無残に切ったり焼いたりする時代の状況と風潮に対し、激しく抵抗するものが、間違いなくあつたのだと、私は固く思っている。

かの、余りにも有名な、

心なき身にもあはれは知られけり

鳴たつ沢の秋の夕暮

の歌にしても、それは、単なる自然詠にとどまるものではない。

人も、鳥も、うっそうたる樹林も、人工物も、星も、空も、それら一切を包含した、いわば、「宇宙のいのち」をいとおしむ思いが、この歌には強く込められているように思えるのである。

西行は、死を間近かとする晩年にあつては、もはや、一人間としてでなく、言ってみれば、造物主の目を借りて、桜花を見、鳥獸を見、樹木を見、人を見ていたのではなかったか。人間が犯す様々の罪なる行為も、既に七十代に達した西行にあつては、造物主の眼に

其の一 西行の生

ひとりねの寝覚めの床のさむしろに
涙もよほすきりぎりすかな

虫の音を弱りゆくかと聞くからに

心の秋の日数をぞふる

野べに鳴く虫もやものはかなしきと

答へましかば問ひて聞かまし

生身の人間が、年がら年中、嬉々として笑い転げ、常住坐臥逞しく生きていける筈がない。人は、泣いたり笑ったり、時には、激しく怒り狂って始末に負えぬ身となつてしまつたり。それ故にこそ、日常の中に、喜怒哀楽の言葉もある。

西行もまた、しばしば孤独に陥り、寂しさに、身を固くして耐えた人であつた。上記の歌は、全て『山家集』所収の歌であるが、虫の音に、わが悲しみの思いを合わせ、寂しき者には、わが心中のさびしさで応じて、小さく弱きものと、体を一つにして共に耐えて生きんとする姿がここにはある。そして、時には、

はらはらと落つる涙ぞあはれなる

たまらずもののかなしかるべし

と、誰に遠慮をするのでもなく、声立てて泣く己れの姿を、藪蔭に身を隠すことなく吐露している。

かつて、勇士と呼ばれた身であろうと、愛する妻や子供たちに、決然と別れを告げ、ただ一人して脱俗の世を生きる覚悟を定めた身であろうと、人は、どうしようもなく淋しさに襲われ、泳えようもなく、はらはらと涙することがあるものなのだ。

ただ、西行は、こうした淋しさの中に、誰に憚ることなく身を置く生き方と共に、「強く耐える生き方」をも、同時に保持していた。歌聖西行が、いかに桜花に思いを寄せ、これを愛していたかは、周知知れ渡っていることであるが、その西行に、

吉野山花をのどかに見ましやは

憂きがうれしきわが身なりけり

の歌がある。「憂きがうれしきわが身」なるが故に、愛好の場の吉野の桜にしても、どうして、いつも、のんびりゆったりと味わったりできようか、時によつては、きっぱりと花見の世界から身を遠ざけることもあるのだ、というのである。

とふ人も思ひ絶えたる山里は

さびしさなくはすみ憂からまし

と詠んだ歌もあるから、何も、己れに無理をし、片意地張つて、桜花を排し、「さびしさ」を求めた訳ではない。西行は、淋しければ、その淋しさの中に身を沈め、しかし、同時に己れが、一個の人間として、揺るぎない人格を確立していく為には、時には、最も愛好してやまないものをも遠くに押しやり、本来、寄り添ってもらつては困るものを、どうぞこちらへと、辛さ承知で招待したのである。

固な意志で出家遁世を決意し、実行に移したことがよく分かる。

慈円の『愚管抄』において、「日本第一の大学生」と評された藤原頼長は、その日記『台記』に、「そもそも西行は、もと兵衛尉義清也、重代の勇士たるを以て法皇に仕ふ。」と記し、続いて、「俗時より心を仏道に入れ、家富み年若く、心に愁ひなけれども遂に以て遁世す。」と述べている。

なるほど西行は、家系からして武勇に縁厚き者であり、その祖には、平将門の乱平定に功を成した藤原秀郷もいる。未だ出家に至らぬ義清は、北面の武士の威風を生まれながらに体内に宿し、その勇姿は、自ずと形となって表に出る資質を手に入っていたのだ。

けれども、「心に愁ひなけれども、遂に以て遁世す」との言は、果たして、的を射たものであろうか。

俗世を捨てて仏道修行の世界に身を置き、世間のあちこちに気楽に足向け乍ら、胸中、湧き出るものがあれば、これを歌にする。それは、中世という混乱の世にあって、日々の糧にあくせくしなくて済む、所謂「恵まれし者」の多くが、一つの生き方として、時に流行的に願ひ、行つたものであった。だが、西行が、それらの人々と等しく、気楽三昧に仏道に身を投じたとは、到底、思えない。

西行は、尋常ならぬ厳しい覚悟のもとに、出家をしたのだ。そのことは、「流転三界中、恩愛不能断」云々の詞書を添えて詠まれた、

捨てがたき思ひなれども捨てて出でむ

まことの道ぞまことなるべき

の詠にも、しっかりと表明されている。

一つのすぐれた人格が、決然として公然たる行為に出る時、そこ

には、いつも、世俗の常識ではとうてい推し測れない複雑なる行動理由があると言えないか。

決めて行つた新たなものが、幾らも時を経ずして、もとの姿にたしかえるとといった場合なら、新たな世界誕生の理由は、ああだこうだと、明瞭、かつ、無責任に示すことも可能となる。しかし、本来ならば、何一つだに苦勞を背に負うこともなく、現状維持に努めてさえおれば、周辺の全ての者から、よき人よ、すばらしき人物よと、最高にもてはやされたに違いない人間が、その榮譽と、生きる条件の贅沢さの一切を放棄して流浪の世界に身を投ずる、それも二十歳そこそこで決然と実行するというのは、一つや二つの理由や解説で、その謂われの説明がつく筈がない。

人は、あるべき世界を求め続けて、並の姿を遥かに越えた覚悟で必死に生きた時、その胸中、体内には、膨大なる思念、理念、想念、そして信念が、渦巻き状となってぎっしりと詰まっていく。そして、その時、もはや他の者には、その人物の心理、行動たるや、いかんとも推察不可能という事態が誕生する。

歌聖西行の分離もまた、そうした割切り不可能、割切り無用の世界だと言つてよい。

第二章 西行の生と死

西行という一個の歌僧の生を、世の人々は、どうしてこんなにも長い期間にわたって、懐かしみ、意義深きものとし、時に、その生きざまに己れを重ね合わせてきたのであろうか。その死に共感し、親しみさえも覚えた人々の姿についても、私なりにこれを追い求め、論述したい。

懸け進ぜたりける」が故に、結果として、それ迄の日常は破綻し、「無為の道」に分け入ることとなったのだという。そして、その、一夜の夢の喜びと儂さを、

思ひきや富士の高根に一夜ねて

雲の上なる月を見むとは

の歌が、如実に示しているというのである。

西行には、

ものおもへどかからぬ人もあるものを

あはれなりける身の契りかな

あはれあはれこの世はよしやさもあらばあれ

来む世もかくや苦しかるべき

何となくさすがに惜しき命かな

あり経ばひとや思ひ知るとて

はるかなる岩のはざまにひとりゐて

人目おもはでものおもはばや

今ぞ知る思ひ出でよと契りしは

忘れむとてのなさけなりけり

と、数々の恋の歌が見られる以上、若き義清の生きゆく上の意志決

定に、恋する思いと、それが生みなす苦悩が絡んでいたことは、推察するに難くない。

しかし、私は、

世をいとふ名をだにもさはとどめおきて

数ならぬ身の思ひ出にせむ

と詠じ、わが身もまた、数ならぬ身ではあるが、世俗に在ることを厳然と忌避した人間であることだけは、はっきりと示しておきたいと言明した西行が、「恋」に絡む悲しみと苦悩を、脱俗原因の大きなものの一つとしたとはどうてい思えない。

遂に出離を遂げた西行は、「世をのがれける折、ゆかりある人のもとへいひおく」との詞書を添えて、次のごとくに、胸中の思いを詠んだ。

世のなかをそむきはてぬといひおかむ

思ひ知るべき人はなくとも

今、現に、「世の中をそむきはてぬ」として生きていく人間が、歴として此処にいる。普通一般人々には、その覚悟の程は、正しくは理解してもらえないであろうが、しかし、わが信頼して余りある「ゆかりある人」だけは、私の思いをよく分かってくれようし、私もまた、しっかりとその意を伝えておきたいのだと、西行は歌っているのである。

西行出離に係わるこの種の歌を合わせ考えると、若き西行が、心中に湧き出る様々の俗なる思いに激しく自責の鞭を当てながら、強

ご覧の通り、私は、『西行花伝』の味わいの大きさに驚嘆し、著者辻邦生の西行観の見事に深く脱帽している。

その辻邦生は、生きることを讚美してやまない文学者であった。『生きていく』というこのなんと新鮮さ、なんとという奇蹟！と、その著に記し、『生きていく』は何ていいことなのだろうと、手放しで、生きてこの世にあることを讚えてきた。

それが、一九九九年七月二十九日、妻と買い物に出かけた先で、あっけなく世を去った。西行と同じく享年七十三歳。

江藤淳のごとく、漱石に係わる大きな仕事を為し、持てる力の多さからして、諸々の世界を今後とも存分に書き記して欲しいと切望されながら、それでも、どうしようもなく自ら命を絶った人もあり、『元気に最後まで生きるのが人生の楽しみ』と、ついしばらく前に明言し、死に至るのはまだまだずっと先のことと思込んでいた人が、願いや認識に反して、呆気なくも死に至る。

これが無常なのか。

若い頃から、六十代半ばの今日まで、長くなが慕い思い続けてきた西行について、私は、今回初めて、それなりの分量の論を書く。久保田淳氏の『西行全集』を座右の書とし、安田章生氏の『西行』や目崎徳衛氏の『西行の思想史的研究』、そして、瀬戸内寂聴の『白道』や白洲正子の『西行』等々、これ迄に、多くの西行に係わる研究書や文学作品を目にし、味わってきた。もとより、辻邦生の『西行花伝』は、心身の全てを傾注して読んだ。

それら、膨大な「西行論」を想起した時、何を今更「西行」、と思わない訳でもない。持てる能力の全てを揮って、考え、調べ、記してみたところで、今日迄に世に出ているものに、ただの一欠けらさえ、新たな西行を付け加えるのは、もはや絶対というべきほど

に無理なことであろうとも思う。書きたいと願えば願うほどに、怯み、心萎える状態となる。

しかし、それでもなお、私は、「西行」について記してみたい。西行を崇敬し、その生の一から十までを、渾身の力を奮って追求し、そして、西行と享年を同じくして旅立った辻邦生を、心を空にして偲びながら、私は、私なりの「西行」を論じてみる。

第一章 西行の出離

西行が、努めて世俗の拘束を排して、こころ伸びやかに生きんとした如くに、胸中に自ずと湧き出る思いの儘に、西行の出離について思いを記してみる。

世を捨つる人はまことに捨つるかは

捨てぬ人こそ捨つるなりけれ

世の多くの者が、俗世を捨て切れぬ儘に日々を過ごし、結局は、一生一度のわが生涯を無為なるものとしてしまう。その轍だけは踏みたくない。形、中味共に、正真正銘身を捨てて出家することで、この体を限りなく生氣あるものにし、意義深き生の証しとしたい。冒頭の歌には、後に歌聖と呼ばれる西行の、出離に当たったの厳しい思いが、よく表現されている。計り知れない程に、多数の人々に愛され、敬されもした西行については、出離の動機一つについても様々の説がある。

『源平盛衰記』は、「さても西行発心のおこりを尋ねれば、源は恋ゆゑとぞ承る。」と記している。「申すも恐れある上臆女房を思ひ

西行考

その出離と生と死に係わる一考察

山下 忍

はじめに

辻邦生の『西行花伝』について、私は別の紙面で次のように記している。

『西行花伝』が、単行本として世に出て、まだ五年が経たない。しかし、私は、この書は既に現代の名著の評価を手にしたと思っている。

筆者辻邦生が、藤原秋実に思いを語らせる「序の帖」を読むと、この著が、いかなる覚悟をもって執筆されたかがよく分かる。「あの人のことを本当に書けるのだろうか。」と秋実は思う。その思いは、もとより辻邦生の思いその儘だ。西行の生きた時代は、「変転極まらない狂乱の日々の連続」であった。その中を、歌聖西行は、心と体の隅々までを鞭打ちながら生き抜いた。「師西行の重さ―それを私はどこから手に入れるべきだったか。」筆者は、秋実共々手探りし、検索し、時に、沈思しながら、西行の世界に深く分け入っていく。「二の帖」から、末尾の「二十一の帖」まで読み至った時、この書物の読者は、誰もが、ほうと大きく息を吐くことであろう。その長く吐く息は、西行を筆者と共に追い求め得た喜びであり、重

厚な書物に接した感嘆の吐息であり、一人の作家を、己れの作家と為すことが出来た感動でもある。

願はくは花のしたにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

この歌は、西行の辞世的和歌として、周知のものであり、西行が、その願い通りに、きさらぎの十六日の望日もちのひに終わりを遂げたこともよく知られているが、若き義清の歌の心と恋の行方、清盛のこと、あるいは、西行の出離と歌道修行の委細等々は、この書をもって本当に分かったことになるのだと言い切ってよい。

ところで『山家集』の中に、「古畑そはの岨そはの立木たてきにある鳩の友呼ぶこゑのすぎき夕暮」という一首がある。この「友呼ぶ鳩」が、私の目には、西行と重なり、西行そのものと化していく。荒寥たる地で、西行が大きく声を発して求めたのは、いかなる「友」であったのか。『西行花伝』は、そうした思いも掻き立てて止まないのである。

宮崎女子短期大学『忍ヶ丘だより』

平成十一年一月一日号（一部加筆訂正）